

法隆寺中門金剛力士像実測調査概要

美術工芸研究室

法隆寺中門の金剛力士像は現在同像修理委員会によつて修理工事が進められているが、同委員会の依頼により昭和37年2月より3月にわたり同像の実測調査を行つた。修理工事は現在も続行されており、併行してほかの調査も行われているので、詳細は後日の修理工事報告書をまつことにし、こゝではとりあえず実測図によつて現状の概略を紹介し大方の参考に供したい。

本像は云うまでもなく、中門の東西の間に各々東方阿形、西方吽形の形姿で対置し、創立は天平資財帳の和銅4年(723)造立の像に比定されるものである。しかしその沿革をたどると、別当記に鎌倉時代文治2年(1133)に彩色されたことをはじめ、天福2年(1130)の修復、さらに延応元年(1320)、文保2年(1320)に彩色のことが見られ、また下つて古今一陽集によれば江戸時代宝永2年(1705)の東方像の修補、さらに享保21年(1776)には、東西いずれの像か不明ながらその雙足の修補のことが見える。最も近い修理には大正4年(1915)の日本美術院第二部による修理がある。しかしもとよりこれが塑造という素材の性質上大正修理以外の各期の修補、彩色の詳細は明瞭でなく、果して本像がどの程度和銅創立、もしくは鎌倉修補の面影を伝えているものか、文献のみでは知り難い。

法隆寺中門金剛力士像実測調査概要

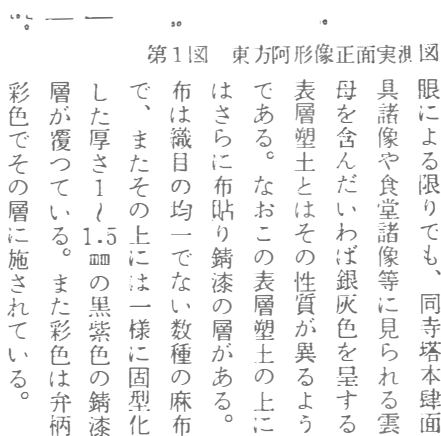
実測調査は像が4mに近い大像であることや像の背面および一方の側面に中門の壁があることなどで困難を極めたが、残る正、側2面に高さ3.9m、巾1.8mの桧材の方形枠を設定し、その枠に張つた前後2重の5cm方眼グリルを透して像面を把握する投影図法を用いた。その結果両像ともに壁に妨げられない正、側2面の大の原図を作製するに至つた(第1・2図)。これらは云うまでもなく、カリパスによる測定や見取図などと異つて、像容を比較的正確に図示することができる。実測図の誤差は透視に當つて生ずる誤差や表現上の誤差を考慮すると、断定することはできないが、グリル交点においては $\pm 1 \sim 2$ mm内外、その他の点でも $2 \sim 3$ mm程度におさえられるものと考えられる。

以下実測図を通じて現状を概観する。ただし本像では当然塑造部分の状態が問題であるので、主として全身塑造の東方阿形像について述べ、追つて西方吽形像に及びたい。

東方阿形像は実測像高377.1cmの全身塑造である。右手第1指および第4指などの欠損部によつて知られるように、両腕、両脚など部分的には木心に塑土を塑形したいわゆる木心塑造であるが、軀軀は基本的には心材を井桁状に構築し、その上に中層土および表層土を塑形したものと推察される。中層土および表層土の厚さは、最も破損の著し

い左腰部分では各々13〜15cm、7〜8mmであつて、造形的に主体となる表層土は比較的薄い状態である。表層土の厚さは部分的に多少の厚薄があつてもおそらく全身この程度のものと推定される。

次に中層土、表層土の性状を簡単に述べる。これらは一見肉眼でも識別できるほどその性質が異なる。すなわち中層土は粒子の荒い黄褐色の荒土で、わらササ混入のいわゆる壁土状のものである。またそれを覆う表層土は淡黄色を帯びた比較的粒子の細かいいわゆる白色塑土で



第1図 東方阿形像正面実測図

ある。しかし注意すべきはこれには微細な繊維質のササを含むが、普通いいう白色塑土に見られる雲母の類は全く含まれていない。もとよりこれらは科学的な分析結果をまたなければ断定できないが、肉眼による限りでも、同寺塔本肆面具諸像や食堂諸像等に見られる雲母を含んだいわば銀灰色を呈する表層塑土とはその性質が異なるようである。なおこの表層塑土の上にはさらに布貼り錆漆の層がある。布は織目の均一でない数種の麻布で、またその上には一様に固型化した厚さ1〜1.5mmの黒紫色の錆漆層が覆っている。また彩色は弁柄彩色でその層に施されている。

本調査の限りでは像の内部構造や中層土の詳細は明らかでないが、少くとも像の造形の主体となる表層塑土およびその上の麻布、錆漆の層については、これらが基本的には同期の一連の工程になる処理と推察される。その期は像の表現形式を勘案すると、ほとん兼倉期の修復に相応するものとみられ、その意味では別当記の天福2年(1033)の修復が注目される。別当記には「天福二年甲午九月日 中門之金剛力士率塗之早 漆寺納定三斗八斗云々」とあるが、ただしこの三斗の漆とは

前述の錆塗層の施工に用いたものとみるべきであろう。周知のように軒高い中門にほとんど吹き晒しの状態で対置する本像は、当然風雨による損傷が著しかつたものと推定され、実測調査中の短い期間の経験でも一寸した雨さえ上半身よりは下半身、殊に両脚部を湿すほどであった。したがって天福年間の修復とは、既に剝落した当初の塑土に換えて新しい塑土で塑形し、当然風化の損傷を避けるためにさらに布貼り錆塗塗りを施したものであらう。追つて延応年間の彩色とはそれと一連の施工であつたものと考えられる。

損傷状態は現状においても著しい。全身に亀裂、剝落、浮上りが見られ、またその性状も単に彩色の剝落のみならず、錆塗層が落ちて麻布面の露われているものや、また表層塑土の露呈しているものなど各所各様である。しかし損傷は相対的に下半身に多く、特に前面裳裾および両脚において著しい(第1図)。なお最も著しい亀裂として、左腰部および背面腰部のものがあげられる。これらは深部に達し、表層塑土と中層荒土とが完全に分離してその間に空洞ができていて、

前述の 一各時代の修補、彩色の詳細 明らか

て困難であるが、ただ大正4年の修補は当研究所所蔵の

美術院第二部資料一によつてその大略を知ることができ、実測図に示した点膜面が確認した

大正修理部分の概略である(第1・2図) また同資料によればその期直前の本像の状況を知

れるが、これによつても本像の風雨による損傷の程度が推定さ

れる。すなわちその期直前においては 両足 左腿部 両眼

結髪部、背部全面には布ちよび

反古紙が貼られ 特(二両足)と後世の拙劣な不造修補で(享保21

第24 西方咩形像正面実測図

第3図 大正修理期西方吽形像部分 (日本美術院第2部資料)

年か)、一見胴切りのような非常に形態の悪い状態であったという。また両眼は割竹の釘を打ちつけた粗末な土の塑形で、その上にこれまた布および反古紙を貼るという惨々な状態であったことがわかる。

最後に東方像に関連させて西方吽形像について略述する。本像は実測像高377.4cmでほぼ東方像と同規模であるが、素材は主として頭部から鎖骨辺までが塑造であり、以下軀軀は木彫である。しかしこれら素材の境界は後世の塑土が木彫部を覆い、また錆漆の層が混在するので明瞭に図示できない。木彫部は第2図で見るとように堅に材を削ぎ合わせた寄木造りであるが、その構造もまた複雑で判然としない。しかし当初は東方像と同様総身布を貼り黒漆塗を施し、さらに朱土による

彩色を施したものであるが、現在は彩色および布がほとんど風化し、わずかに黒色を帯びた木肌を露わにしている。

塑土は前述のように頭部から首を経て像前では鎖骨辺に至り、また別に肩より背部上半身を覆っている。さらにこの上にも東方像同様布張り錆漆層が認められる。しかし第2・3図によつても明らかのように、大正修理までは一顔面右方及び背ノ如キハ最モ後ノ修理ナルガ如ク、古キ原作ノ塑土ノ上ニ竹釘ヲ打付ケ、コレニ調合ノ一致セザル粗末ナル塑土ヲ盛上ケ、ソノ上ニ反古紙ヲ貼り墨ヲ塗抹(日本美術院第2部資料)する状態であったと見えるから、西方吽形像も東方像以上に風化の損傷が著しかったものとみられる。

したがつてある時期迄に当初の下半身が心材のみをとどめる程度にその塑土を欠失し、それを補うために現在みる木彫部の軀軀を修補したもののよう¹⁾に推察される。しかしその時期は断定できないが、この部分の造形手法を考慮すると、東方像同様にこれを鎌倉期に相応させることは極めて困難なようである。

以上実測図を通じて両像の現状を概観したが、もとよりその詳細は後日の調査報告をまたねばならないが、本調査の限りでは要するに両像ともに非常に風化損傷が著しく、後世の度重なる修補、彩色によつて、現在の造形的主体である像面には少くとも和銅創立の造形を認め難いということである。

(長谷川 誠)

(付記) 実測調査は同像修理委員会小林剛委員の指導のもとで、奈良国立博物館岡直二技官を調査主任とし、当研究所建造物研究室の牛川喜幸技官の協力を得た。なお実測図掲載等については同委員会の承認を得た。